

## ジャック・ロンドン作 「白人のリ・ウォン」

メタデータ	言語: jpn 出版者: 明治大学教養論集刊行会 公開日: 2017-02-06 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 大矢, 健 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10291/18427">http://hdl.handle.net/10291/18427</a>

ジャック・ロンドン作「白人（白人註）のり・ウォン」

大矢 健 訳

「日が沈むよ、カニム、昼の暖かみが消えてしまったよ」

り・ウォンは男に声をかける。男の頭はリスの皮の寝袋の下に隠れていた。彼女の声は柔らかい。まるで彼を起こさなくてはいけないという義務と起こすのが怖いという恐怖に、引き裂かれているかのようなようだ。じっさいのところ、彼女は大きな体をした夫のことを恐れていた。夫が今まで知った男たちとはまったく違っていたからだ。

ヘラジカ肉が忙まよしくジュージュと音を立てる。女は赤い残り火のはしにフライパンを移動させた。そうしながら、二匹のハドソン・ベイ犬を物憂げに眺めた。犬のほうは腹を空かせて深紅の舌から涎よだれを垂らし、彼女の一举手一投足を見つめている。巨大な犬で毛はふさふさだ。犬たちは何百何千もの蚊から身を守るべく、焚き火の風下、煙の中に入っている。クロンダイク河が氾濫しそうな水量を両岸に打ち当てている崖のほうへとり・ウォンが視線を移すと、犬の一匹が芋虫のように腹ばいになってこちらににじり寄ってきた。そして、猫のような巧みな腕さばきで、フライパンの上の熱い肉に前足を突き刺し地面に転がした。が、り・ウォンは視界の端っこに彼を捉える。すると犬はピョンと後ろに飛びのく。り・ウォンが燃えさかる薪で鼻を叩くと、唸り声をあげた。

「駄目だよ、オロ」と彼女は笑う。犬から目を離すことなく肉を奪回する。「いつでもお腹をすかせてる奴なんだ。で

も、あんたの鼻が際限のない厄介にあんた自身を巻き込むことになるんだよ」

ここでオロの相棒が彼に加わる。二匹一緒になって女に挑戦しようというのだ。何度も打ち寄せる波のように、背中と肩の毛が怒りで逆立つ。口元は歪み、悪意にみちた皺がよる。肉を引き裂く牙が見える。残虐で威嚇する牙だ。鼻穴さえギザギザになって、獣らしい情熱で震える。彼らの唸り方は狼のそれだ。あり余る憎悪とこの種特有の敵意が、女に飛びかかり彼女を打ち倒すことを命じていた。

「お前もくるの？ バッシユ。ご主人さまと同じくらい獯猛なものだから、餌をくれる手とも仲良くなれないのかしらね。でも、これはあんたのけんかじゃないんだよ。だからいい子にしなさい、今すぐ」

こう大声で言いながら、彼女は火のついた薪を手にして立ち向かっていった。犬たちは棒を避けながらも後退しようとはしない。二匹は二手に別れ、挟み打ちする恰好で近づいてくる。身を低くかがめ、唸り声をあげる。リ・ウォンは、三角テント、ティピーの皮の束の中でハイハイしてしていたときから、狼犬と覇権を争ってきたのだ。そして、このとき、自分の身に危険が迫っていることを彼女は知っていた。バッシユは前進を止めている。今にも飛び掛ろうと全身を緊張させている。オロも飛びかかれる距離にまでにじり寄ってきた。

炎を放つ棒の焦げが残る端を両手に掴み、彼女は二匹の獣と対面する。一匹は後ずさりしたが、バッシユは飛びかかってくる。リ・ウォンは火のついた武器で応戦する。苦痛を表わす甲高いキャンという鳴き声と毛と肉の燃える臭いがすぐさま立ちのぼった。バッシユは泥の中でのたうち回る。彼女は彼の口の中に燃える棒をつっこむ。激しく吠えながら、犬は彼女の手が届かないところまで横に飛ぶ。恐怖に駆られ安全なところまで逃げ出したのだ。リ・ウォンが重い薪を一本横腹に投げつけたものだから、反対側にいたオロも後退を始めた。火のついた枝を雨あられと投げつけられて、二匹は退却していった。キャンプの隅までたどりつくと、傷口を舐め、代わるがわるクンクンと鳴き、歯をむき出しにし

て威嚇する。

女は肉から灰を払い落とすと、ふたたび腰を下ろした。心臓の鼓動は普段のとおりだ。そしてこの出来事は、もう昔のことになっている。というのも、こんなことはいつものことなのだ。騒動のあいだもカニムは身動き一つしなかった。大きないびきをかいていた。

「起きて、カニム」と、リ・ウォンが呼びかける。「昼の暖かみは行ってしまったよ。旅が我々を待っているよ」

リスの皮の寝袋がもぞもぞと動き、茶色の腕がそれを払いのけた。だが、臉は震えたものの、男の目はまた閉じられてしまった。

「荷物は重いものね」と、リ・ウォンは考える。「朝の仕事で疲れてしまってるんだわ」

一匹の蚊が彼女の首を刺した。すると彼女は、いつでも使えるようにと手元に置いてあった土の塊から湿った粘土を抜き出し、首元の守られていないその部分に塗りつけた。虫に取り囲まれ悩ませられながら、苦勞して谷間を抜けた午前中ずっと、この男と女は粘土のマスクで顔を覆っていた。顔の動きでそのマスクにはいくつものひび割れができてしまふものだから、粘土は何度も何度も塗り直さなければならなかった。それで厚さはまちまち、見た目は悲惨という具合だ。

カニムが目覚め起き上がるまで、リ・ウォンは優しく、しかし我慢強く何度も揺さぶる。カニムは目を覚ますと、まず太陽に見つめた。天空の時計としばらく相談したあと、焚き火のほうに前かがみとなり、がつがつと肉にありついた。大きなインディアン男で、身長は六フィートを超えている。深い胸に分厚い筋肉。目つきはするどく、平均的インディアンのもれより強力な知力が備わっている。強烈な意志力を示す深い皺が何本もはしり、頑固さと素朴さがいまって、原住民の不屈の精神、揺るがぬ意志を示していた。もし意志が挫かれたりすれば、無言のまま残虐行為に訴

えるのだ。

「リ・ウォンよ、明日はお祝いの宴としよう」。骨を髄まで舐めまわしたあと、カニムはそれを犬たちのほうへ放った。「ベーコンの油でフライド・ホットケーキにするんだ。砂糖も使う。うまい飯になるだろう」

「ホットケーキ？」と、リ・ウォンが質問する。珍しいというかのようにその単語を口にしてきた。

「そうだ」と、威厳をもってカニムが答える。「新しい料理の仕方を教えてやるとしよう。こういうことに関して、お前はまったくの無知だからな。お前の知らないことは他にもたくさんあるが。これまで世界の狭い片隅でお前は生きてきた。だから、何も知らん。だが俺は違う（彼は背筋を伸ばして胸をはり彼女を見下ろす）。俺は大いなる旅人なのだ。あらゆる場所を訪れたことがある。白人に会ったこともある。俺は彼らのやり方にも、他の連中のやり方にも通じている。木ではないからな、いつも一つの所に留まっているわけにはいかない。丘の向こうに何かがあるか知らないままの木とは違うんだ。俺は、カヌー使いのカニム。そちらにもあちらにも行く。世界の端から端まで道を求め旅する者なのだ」

女は黙って頭をたれた。「本当ね、私が生まれてから口にしたのは、魚と肉と木の実だけ。世界に隅っこで生きてきた。あなたが私を私の一族からさらうまで、世界がこれほど広いなんて知らなかった。あれ以来、数え切れないほどの道をとおり、ずっとあなたに食事をつくって荷物を運んできた」。急に、彼女は顔を上げる。「教えて、カニム。この旅に終わりはあるの？」

「ない」。これがカニムの答えだ。「俺の旅は世界のようなものなのだ。終わることはない。俺の旅こそが世界そのものだ。足が俺を運べるようになって以来、俺はずっと旅をしてきた。そして死ぬまで俺は旅を続けるだろう。俺の父と母は死んでいるのかもしれない。最後にお目にかかったのはずっと昔のことだ。だが、俺はこれを気にしたりはしない。俺の部族はお前の部族に似ていた。一つの場所に留まるからだ。その場所というのはここから遠く離れておるがな。が、

部族のことも俺は気にしない。なぜなら、俺がカヌー使いのカニムだからだ」

「そして、リ・ウォンも、疲れきってしまったリ・ウォンも、死ぬまで一緒にあなたの道を旅していかなくてはならないの？」

「リ・ウォンよ、お前は、俺の妻だ。妻というものは、夫のゆくところ、どこへでも着いてゆくものなのだ。それが掟というものなのだ。万が一それが世界の掟というものでないとしても、それはカニムの掟である。そして、カニムは自分自身と彼の所有物に対して法を授ける者なのだ」

リ・ウォンはふたたび頭をたれた。男が女の主人である、この掟以外を知らなかったからである。

「しかし、急ぐことはないのだぞ」と、カニムがリ・ウォンに注意した。彼女が貧相なキャンプ道具をまとめて背中に縛りはじめたからだ。「日はまだ暖かく、道は下りで、足場も良い」

従順に彼女は作業を止め、腰を下ろした。

カニムは、空想に駆られた眼で彼女をしげしげと見る。「お前は、他の女のように地面に尻をつけては座らないのだな」と観察する。

「しないわ」と彼女。「あの座り方は楽じゃないのよ。疲れてしまうの。休むことができないもの」

「足が前に真っ直ぐに伸びないのはなぜなのかな？」

「分からない。私の足は他の女の人の足とは違うということ以外、分からない」

満足したという光がカニムの目に浮かぶ。が、それ以外の変化はない。

「髪は他の女のように黒いぞ。でも、お前の髪が柔らかく細い、他の女の髪より柔らかく細いというのに気がついていたか？」

「気づいてた」と、言葉少なに彼女は答える。自分の性的欠陥を冷静に分析されるのが好きではないのだ。

「俺がお前をお前の部族から引き離してから、一年になる」とカニムは続ける。「初めて目をかけたときから、お前が恥ずかしがり、俺を恐れるのは変わらない。これはなぜだ？」

彼女は首を横に振る。「カニム、私はあなたが怖い。あまりに大きくて、そして奇妙。それ以前に、あなたが私を見初める前にも、私には若い男の人が怖かった。分からないわ……。何も言えない……。どういうわけか、自分はいちばん最初の人たち向けにできてはいないみたいなきががしていた。それはまるで……」

「続けよ」と彼が促す。彼女の戸惑いにいらいらしていた。

「まるで彼らが同じ種類の人ではないみたいだ」

「同じ種類の人ではない？」と、ゆっくり考えながら、彼が訊いた。「それでは、お前と同じ種類の人とは誰なんだ？」  
 「分からないわ……」。当惑したように彼女が首を横に振る。「感じることを言葉にできないの。これが私の変なところ。私は、他の女の子たちとも違ってた。あの娘たち、こっそり若い男を求めていたわ。ああいう風には若い男の人を好きになれなかった。すごく間違っていて、いけないことだと思ってた」

「思いつけるいちばん最初のことというのは何だ？」カニムが突然、まったく関係のないことを尋ねた。

「母さん、ポウ・ワ・カーンのこと」

「ポウ・ワ・カーンより前のことは何もないのか？」

「他には何も」

しかしカニムはリ・ウォンの目をしっかりと見定め、彼女の秘密の魂のありかを探り当て、目が逡巡し揺れているのを見た。

「考えろ、必死に考えるんだ、リ・ウォン」と言って、彼は脅す。

彼女は何かしか口ごもる。目は同情を求めていた。それでも、カニムの意志が彼女を圧倒し、彼女の抵抗する唇から言葉を引き出した。

「ただの夢なのよ、カニム。子どものころの悪い夢。現実のものでない物の影。陽だまりで眠る犬が見て鳴き声を向ける幻なのよ」

「話してみよ」と、彼は命じる。「母ポウ・ワ・カーン以前の出来事のことを」

「忘れてしまった昔のことなの」と、彼女は抵抗する。「子どものころ、私は起きたまま夢を見たの。太陽の光を目に入れたが。目にした奇妙なものを話すと笑われたわ。周りの子たちはみんな、私を気味悪がって近寄らなかつた。見たものことをポウ・ワ・カーンに話すと叱られた。邪悪な夢だと言って。ぶたれたこともある。病気だったんだと思う。歳とったおじいさんが罹る病みたいな。やがて私も良くなって、もう夢を見なくなった。今は……、思い出せないの」。混乱してしまつたように、彼女は手を額にやった。「こころ辺にあるの、この辺。でも、もう見つけられない……。ただ……」

「ただ、何だ」と、カニムが言葉をくり返す。彼女の肩を掴んでいた。

「ただ一つだけ。馬鹿みたいと笑うと思う。あり得ないことだから」

「笑つたりはせんよ、リ・ウォン。夢は夢なのだから。それは、我々が生きた別の人生の記憶なのかもしれん。俺は、かつてヘラジカだった。俺がかつてヘラジカだったと、俺は強く信じている。夢で見たこと、聞いたことを考えると」

必死に隠そうとはしていたが、彼の不安が大きくなるのは、見た目にあきらかだった。だが、リ・ウォンは光景を描くための言葉を探していた。だからそれに気づかない。



「木々のあいだに雪が踏み固められた場所が見えるの」と、彼女は話を始める。「雪の向こうに、そこまで四つんばいになって体を引きずってきた男がいる跡も見える。雪の中にその男の姿も見える。見てるとすぐ近くにいるような感じがした。本物の男ではないみたい。顔に毛が生えているし、それもすごい量の毛なの。顔の毛も頭の毛も、イタチの夏毛みたいに黄色なの。目は閉じられてた。でも開かれると、目は辺りを警戒する。空のような青い目。私の瞳を覗き込むと、警戒は終わる。手が動く、ゆっくりと。疲れてしまっていたからなのかしら。そして、私は感じるの……」

「なるほど、それで」と、カニムがかすれた声で囁く。「何を感じる?」「違う、違う」と慌てた彼女は大声になっている。「何も感じない。感じるって、私、言った? そういうつもりじゃなかったの。そんなつもりだったはずがないの。私は見るの、ただ見えるだけ。そして見えたのはそれだけ。雪の中の男。目は空の色で、髪はイタチの色。何度も見たわ。いつも同じ情景。雪の中に男が一人」

「自分のことは見えるのか?」と、男が訊く。前に乗り出し、リ・ウォンをじっと見つめていた。「その男と自分を一緒に見たことがあるのか?」

「どうして自分のことが見えるの? 私が本物でないとも言うの?」

カニムの緊張は解け、体は元の位置に戻った。彼の目には喜びと満足の表情が浮かんでいたが、見られないようにと視線を逸らしていた。

「いいか、よく聞け、リ・ウォンよ」と、カニムはきっぱりと言った。「前の人生でお前は小鳥だったんだ。それを見たときムース鳥(ハシバト)だった。その記憶がまだ残っているわけだ。奇妙なことではないぞ。俺はかつてヘラジカだった。親父の親父はのちに熊になった、シャーマンの言うことを信じればな。奴は嘘はつかん。つまり、神の道においては、我々はある一つの命から別の命へと移っていくのだ。神々だけが知り理解していることなのだがな。夢と夢の影は記憶にな

る。記憶にしか残らないということだ。陽だまりでクンクンいいながら眠る犬も、消え去った物事を見て覚えているに違いない。そのバッシュは、かつて戦士であった。あいつがかつて戦士であったと、俺は強く信じておる」

カニムは犬に骨を投げると立ち上がった。「行くぞ、出発だ。日差しはまだ強いが、しばらくはまだ涼しくはならないだろうからな」

「その白い人たちは、どんな風だったの？」と、リ・ウォンが勇気を奮い起こして訊いた。

「お前や俺と変わらんさ」とカニムは答える。「ただ肌の色が薄いだけだ。今日の終わり前に、お前もあいつらに会うことになるさ」

カニムは、寝袋を百五十ポンドの荷物に結びつけると、どろどろの粘土を顔に塗りつけた。そして、リ・ウォンが犬たちに荷物を運ばせる準備を整えるまで、座って休んでいた。オロは彼女が手にした棍棒を目にすると縮み上がり、四十ポンドちょっとの荷物が装着されるのに抵抗はしなかった。が、バッシュのほうは腹を立て反抗の仕草を見せた。荷物が繋がれるとき、悲しみと怒りの声をあげずにはいられなかった。紐が締めつけられると背中中の毛を逆立て牙をむき出しにした。自らの性格のうちにあるあらゆる悪意を込めた眼差しを、横から後ろから彼女に投げかけた。カニムが嬉しそうに言った。「こいつはかつて偉大なる戦士だったと言ったらう」

「この毛皮はいい値になる」と、帽子の位置をなおし荷物を持ち上げながらカニムは言う。「かなりの値がつく。この手のものに白人たちは大金を払う。奴らに狩をする時間はないし、冷気にも弱い。だから俺たちは、すぐに祝宴をひらくことになる。これまでの人生で経験したことがないような盛大な宴になる」

リ・ウォンは主人の優しさを認め、感謝の言葉を口ごもる。そして荷物の引き綱の中に入り、前かがみになって進みだした。

「俺が次に生まれるときには、白人に生まれつきたいものだ」と彼は付け加え、足元から急峻に下ってゆく谷間への道に歩を進めた。

犬たちが彼のすぐあとを着いていく。リ・ウォンがしんがりだ。が、彼女の思いは、ずっと遠くの場所に向かっていた。アイス・マウンテンズ（氷山脈）を越え東方に。そして、彼女が子ども時代を過ごした辺鄙な場所へと。彼女は思ひ出していった。子どものころから、彼女は不思議な子どもと見られていた。何か障がいを抱えた子どもだと。事実、彼女は覚醒したまま夢を見ることがよくあり、目にしたその特異な光景を口にしたため叱られたり折檻されたりした。やがて、年を経てそれもなくなったのだが、それでも、その夢見が完全になくなったわけではなかった。覚醒時にそんな夢に悩まされることはなかった。けれど成人した女となっても、寝ているときには夢が訪れた。そんな悪夢は曖昧で意味をなさない羽ばたくような形をして、何度も、幾晩にもわたってやって来た。カニムと話したことで彼女は興奮していた。だから、峡谷の捻じ曲がった斜面を下りながら、あざ笑うかのような夢の幻影に、彼女の意識は引き込まれていった。

「一息いれよう」とカニムが言う。二人は小川の底への道程の中間地点近くに来ていた。

彼は飛び出した岩の上に荷物を置き、帽子を脱いで座り込んだ。リ・ウォンもそれに倣う。犬たちも横でゼーゼーいながらのびていた。足元には、山からきた氷河の雪解け水が流れていた。泥を含み汚らしい色をした水だった。まるで、地球のちよっとした振動で汚された水のようにだった。

「この汚れはなぜ？」と、リ・ウォンが訊く。

「地面を掘る白人たちのせいだよ。耳をすませてみるがいい」。カニムは手を耳に当てた。つるはしとシヨベルの音、男たちの声が聞こえてくる。「金に狂きっちゃったのさ。金を見つけようと休みなく働きつづけてる。金とは何か？ 黄

色い色をして地面から出てくるものだ。大いに価値あるものとされている。と同時に、価値自体を測るものでもある」

しかし、目はあてもなくさまよっていたから、彼女の注意はカニムから引き離されていた。スプールの若木の藪で見えにくくなっていたが、ほんの数ヤード下のところに、土でできた屋根を支えるような丸太小屋が建っていたのだ。興奮が彼女の全身を駆け抜けた。夢の中の幻影が立ち上がり、もそもぞと動いていた。

「カニム」と、不安の苦痛のなかでリ・ウォンが囁く。「カニム、あれは何？」

「白人のティピーだ。あそこで飯をくらって眠るんだ」

彼女は羨ましいかのように見つめている。その美点はすぐに分かった。説明のつかない感動にわくわくしていた。「冷気に包まれても、あれの中は暖かいに違いないわ」と、彼女の声は大声になっていた。自分の唇が不思議な感じの音を作りそうな感じがした。

それを口にできるように思ったが、言葉にすることはなかった。と、次の瞬間にカニムがこう言った。「あれはキャビンと呼ばれているんだ」

リ・ウォンの胸は高鳴る。その音よ！ まさしくその音！ 急に怖くなったかのように、彼女はあたりを見回す。なぜその単語を耳にする前に私はそれを知っていたのだろうか？ どうしちゃったのかしら？ それから、なかば恐怖、なかば喜びをともなった衝撃とともに、彼女は理解した。彼女の夢の囁きに正気と意味が含まれていたと、生まれて初めて知ったのである。

「キャビン」と独り言をいうように、彼女はくり返した。「キャビン」。辻褄の合わない夢の材料があふれ出し、頭がくらくらして心臓が張り裂けそうになった。影たち、ゆっくりと姿を現す物たち、それが連想させる理解不能な物たち。それらが蠢き、飛び回った。必死に意識でもってそれらを捕らえ我が物としようとする。が、駄目、捕まらない。そ

んな記憶の断片、多くの断片に、秘密を解く鍵があると感じていた。それを捕らえ我が物とできたら、すべてが明らかとなるのに……。

ああ、カニム！ ああ、ポウ・ワ・カーン！ 影よ、影。あれは何？

カニムのほうを向き、言葉を失い震えている。夢の材料が混沌となって、狂ったように押しつぶしてくる。気分が悪くなり、倒れてしまいそうだ。だからできたのは、美しい曲想でキャビンから流れてくるうっとりする調べに、耳を委ねることだけだった。

「うむ、バイオリンだな」とカニムが教えてやった。

しかし彼の声はリ・ウォンには届いていない。包まれたエクスタシーのなかにあって、ついにすべてが明らかになりそうだった。とうとう今になって、と彼女は考えていた。急に涙が浮かんできた。それが頬をつたう。秘密がその扉を開けようとしている。でも、気を失ってしまいそう。何とか持ちこたえられたら、もう少しだけ何とか……。けれども山々は歪み隆起する。丘は空を背景にして前後に揺れる。彼女は真っ直ぐに立ち上がった。叫んでいた。「お父さん、お父さん！」すると、太陽は傾き、暗闇が襲ってきた。彼女は硬直した足取りで前に揺れ、岩のあいだに倒れこんでしまった。

カニムは、重い荷物で首が折れてしまったのかと調べてみた。そうではないと、満足げに喉を鳴らした。それから、小川でくんできた水をぶっかける。彼女はゆっくりと意識を取り戻し、しゃくりあげるような嗚咽をあげながら、座ったまま体を起こす。

「頭に直射日光が当たるのがいけなかったのか」と、カニムは言ってみた。

「それがいけなかったの。荷物も重たかったし」と、リ・ウォンは答える。

「今日は、キャンブを張るのを早めにするでしょう。そうすれば、ゆっくり眠れるし、元氣も戻ってくる」と、カニムは優しい。「今出発すれば、床につくのも早いぞ」

彼女は何も言わなかった。黙って従い、よろよろと立ち上がる。犬も仕事に就かせた。彼女は機械的にカニムの歩調を合わせ、彼に着いてキャピンの横を通りすぎた。ほとんど息をしようともしていなかった。入り口の戸は開いており、薄い鉄板の煙突からは煙がのぼっているのに、音は何も聞こえてこない。

二人は、小川が曲がる場所である男の姿に出くわした。肌の白い青い目をした男である。そのとき、リ・ウォンには雪の中にいた別の男が見えていた。視界はぼんやりしていた。体力を失いこれまでのことで疲れきっていたからだ。それでも、彼女はその男をまじまじと見つめた。仕事をしている男の姿を、カニムと一緒に歩を休めて見つめた。見つめられている目の前で、男は巧みな手さばきで、選鉱なべの底に広い帯になった黄色の砂金をきらめかせた。

「この川は、とてもリッチなんだよ」と、カニムは歩きながらリ・ウォンに説明する。「いつの日か、そんな川を俺も見つけてやる。そうしたら大金持ちになれる」

キャピンの数も男たちの数も、増えてきた。そしてやがて、二人は小川の中心部分が眼前に広がる場所までやって来た。それは、巨大な破壊の光景だった。いたるところで、大地は引き裂かれ切り刻まれていた。まるで、ギリシヤ神話に登場する巨人族のタイタンが競い合ったあとのようなのだ。掘り出された土くれのないところには、巨大な穴と溝が口を開けている。表面の土が岩床まで引き剥がされたところには、いくつもの深い溝が掘られていた。自然の侵食による支流はこの川にはないが、川の流れはそこらじゅうで堰き止められ、方向を変えられ、細かい用水路に沿って空中にも飛ばされてもいた。それはやがて窪んだところ、低いところに集まるのだが、ふたたび巨大水車により持ち上げられ、何千回となく使いまわされていた。丘は木をなぎ倒され裸となり、その横腹は木材運搬スライドや採鉱用の穴によって

くり抜かれ、穴だらけのありさまだった。そこら一面に、蟻の大群のように男たちが巣くっていた。泥にまみれ汚らしい、髪を振り乱した男たちである。自分たちの掘った穴から這いずり出入りする男たち。彼らは、水路の横を大きな虫のように四つんばいで動き回っている。片時も同じ形をしていない土の山を相手に汗して働いていた。丘の頂上にいたるまで、目の届くかぎりの場所で、男たちは自然の顔面に穴を掘り、皮を引き剥がし、溝を穿っていた。

こんな恐ろしいまでに変貌した自然の姿に、リ・ウォンは驚愕した。「本当にこの人たちが狂ってる」と夫にこぼした。「不思議はない。奴らが求めている金というのは、それぐらい価値のあるものなんだ」とカニム。「世界でいちばん貴重なものなんだ」

数時間にわたり、二人はこの人間の食欲が生み出したカオスの中を通過していった。カニムは興味津々で夢中になり、リ・ウォンは落ち着かず気落ちしていた。彼女には、自分が秘密の開示の目前にいたことが分かっていた。そんな開示の目前に自分がいることは分かっていたが、それでもここまでを受けてきた緊張に疲れきっていた。そして、何かはわからないが、それが起こるのをただ受身のまま待っていた。あらゆる方角から、彼女は数え切れないほどの刺激を受け取っていた。その刺激、印象が彼女の疲弊した想像力に穏やかな興奮を与えている。内側のどこかが外側の物事に反響している。忘れ去られていて夢にも見なかった対応が、それらの関係が、新たにされていたのだ。これに強い興味は覚えなかったけれど、彼女はそれを意識はしていた。彼女の魂は混乱していたが、刺激を變形し理解するのに必要な知性の高まりを許容することはなかった。だから、彼女は主人のすぐあとをとほと歩き、起こらざるをえないと分かっていたことが、どこかで、なにがしかのやり方で起こるのをただ待っていた。

狂った男たちによるこのような虐待を耐え忍んだあと、小川はようやく元の流れへと戻っていった。苦痛のものがきかなくなる汚れをまといながら、小川は広い平原と樹木をたたえる平地を抜けたあと、けだるそうに蛇行しながら流れていっ

た。谷間がその終端にむけ大きく広がろうという場所へと向かっていたのだ。「ベイ」と呼ばれる鉱物に富む鉱脈もここで終わっていた。男たちには、その先にある誘惑とつき合う気はなかった。ここで、リ・ウォンは棒でオロをつつこうと立ち止まった。とそのとき、どこかから女性の甘く銀色の笑い声が聞こえてきた。

キャビンの前に一人の女が座っている。肌は白く子どものように赤みがかっている。戸口に立つもう一人の女の言葉に、嬉しそうなえくぼを浮かべていた。腰を下ろしていた女が茶色で嵩のある髪を解き放つ。濡れた髪はその湿り気を太陽の暖かな抱擁に捧げている。

この瞬間、リ・ウォンは凍りつき立ち止まった。目がくらむような輝きまでは意識があった。そして、何かが断ち切られたようにブツリ。キャビンの前の女が消えた。キャビン、高いスプルスの木、ギザギザの地平線。もう一つの別の太陽の輝きの中にある別の女の姿が、リ・ウォンの目に浮かぶ。嵩のある黒髪にブラシをかけている。ブラシをかけた歌を歌っている。リ・ウォンには歌詞が聞き取れた。意味も分かった。リ・ウォンは、そこで子どもだった。打たれたような衝撃をもって、ある光景が目映る。すべての厄介な夢が混じりあい一つになっている光景だ。形と影がいつもの様相を帯び、すべてが明瞭明白でリアルである。無数の絵が押し合いへし合いしながら通りすぎてゆく。奇妙な風景、木々、花、人びと。リ・ウォンにはそれが見え、そしてそれらが何だか知っている。

「お前が小鳥だったころ、お前が小さなムース鳥であったころ」と、カニムが言っている。彼の目は彼女を見つめ、燃えるような視線が彼女を突き刺していた。

「私が小さなムース鳥であったころ」と、リ・ウォンも囁く。声は小さく低く。カニムにはほとんど聞こえない。頭に紐をまわし旅路にふたたび着いたとき、リ・ウォンは、自分が嘘をついたのを知っていた。

「クロンダイク河はユーコン河に注いでいる」と、カニムは言っていた。「でかい川だ、お前の知っているマッケンジー



川よりでかい。俺たちはな、お前も俺もだ、ユーコン砦に向かっているんだ。犬を連れていければ、冬で二十日眠れば着く。そのあとは、ユーコン河沿いに西へ行く。百日の眠りの旅、二百日の眠りの旅。聞いたことがないから分らないが。でも、すぐく遠い。するとやがて海につく。海のことには知らんだらう。教えてやる。湖と島の関係というのが、海とこの大地の関係になる。その海というのに、すべての川は流れ込む。そして海には終りが無い。俺はハドソン湾で海をみたことがある。アラスカからは見たことがないがな。海では、お前と俺とでカヌーに乗るかもしれない。いや、陸づたいに南に向かい何百日も眠りを取る旅になるかもしれない。そのあとのことは、俺は知らん。知っているのは、俺がカヌー使いのカニムであり、大地を旅し放浪する者であるということだけだ」

リ・ウォンは座ったまま聞いていた。途切れることのない荒野を貫く旅のことを考えると、恐怖が心を侵食してくるだけだった。「たいへんな旅になりそうね」と彼女は言った。諦めたように頭を膝の上についた。

そのとき素晴らしい考えが浮かんだ。そのあまりの素晴らしさに、彼女の頬は火照った。小川まで降りていった。そして乾いた泥を顔から洗い落とす。水滴がなくなると、水面に映った自分の顔をじっくりと見つめた。日差しやら天候やらのせいで酷い有様だ。硬さや茶色の肌やらで、子どものころのような柔らかさもえくぼもない。それでも、その思いつきが気に入ったから、夫の寝袋にもぐり込んだときにも、頬は火照ったままだった。

彼女は目を覚ましたままだった。青い空を見つめたまま、カニムが深い眠りに落ちるのを待っていた。夫が眠ると、虫のようにゆっくり、そして慎重に抜け出し、寝袋の縁を夫の肩に回した。そして彼女は立ち上がる。一歩歩いたとき、バッシュが擽猛なうなり声をあげた。静かにするようにと囁くと、彼女は夫のほうを振り返った。カニムはいびきをかいて深い眠りについていた。踵を返すと、音もたてずに足早に、彼女は裏の道を登っていった。

イヴリン・ヴァン・ウィック夫人は、そのとき、ベッドで眠りにつこうとしていた。社交界の慣習、富、未亡人となつた気楽さに飽き飽きしたウィック夫人は、極北の地へと旅立ち、金の採掘地近くの快適なキャビンで生活することにしたのだ。友人であり相棒でもあるマートル・ギディングスに助けられながら、大地のそばの生活というお遊びに手を出してみることにしたので。洗練された気前の良さでもって内なる「原始的なるもの」を育んでみようというのである。

何世代にもわたって築き上げられてきた文化と客間の洗練から逃れ、祖先たちが身につけた「大地の握力」を取り戻そうともしていた。石器時代の人びとの精神状態——彼女が好き勝手に想像したものであるが——にも近づこうとしていた。枕に頭を横たえるのに髪の毛をばらしている今は、旧石器時代の求婚の場面を空想しているところだ。洞穴式住居、ひびの入った脊髄の骨、ときどき恐ろしい肉食獣や毛むくじらのマンモスが登場し、火打石を乱暴に削っただけのナイフを手にした戦い、そんな内容の空想だ。しかしそれは気持ちが良い。獣の皮に身を包み、おでこの出っ張った求婚者があまりにせっかちにアプローチしてくるものだから、イヴリン・ヴァン・ウィックは暗い森の小道を駆け抜ける。と、そのとき、キャビンの戸が開いた。ノックをするという礼儀も知らずに。そこには、獣の毛皮に身を包んだ女がいた。そして、その野蠻な原始人は、中に入ってきた。

「何なの？」

洞穴に住んでいた女も顔負けの跳躍力で、ギディング嬢がテーブルの後ろの安全な場所に避難した。が、イヴリン・ヴァン・ウィック夫人は一步も引かない。この闖入者がすごい興奮状態にあることを夫人は知っていた。ベッドへの通路が確保されていることを確かめるべく、さっと後ろを覗く余裕もあった。枕の下には大きなコルト銃がある。

「しげんよう、素晴らしき髪をした女性」と、リ・ウォンが言う。

しかし、彼女の言葉は原住民の言葉だ。地上の片隅の村でのみ話されている言語である。だから、二人の女には彼女

が何を言っているのか分からない。

「助けを求めに行ったほうがいいかしら？」と言うギディング嬢の声は震えている。

「このかわいそうな娘が害をなすとも思えないわ」と、ヴァン・ウィック夫人は答える。「それに、あの毛皮の着物を見て、使い古されてぼろも出てるけど、でも、かなりユニークなものよ。コレクションのために是非とも買いたいわ。マートル、砂金袋を持ってきて、それと測りも」

リ・ウォンは唇の動きを追っていた。でも、意味は分からない。そしてこの緊張と不確実性の瞬間に、両者のあいだに意志伝達的手段がないことに初めて気がついた。

言葉が通じないから余計に熱くなって、彼女は大声をあげた。「あなたと私は姉妹の関係なのよ！」

哀願するかのように近づくり・ウォンの頬には、涙が流れる。声にならない嗚咽は、口にできない悲しみを伝えていた。が、ギディング嬢は震えていただけであり、ヴァン・ウィック夫人も困惑しただけだった。

「あなたたちのような生活がしたい。あなたの生活は私の生活。同じもの。私の夫はカヌー使いのカニム。大きくて奇妙な人。そして私はあの人を怖い。彼の道は世界に続き、終りが無い。私は疲れてしまっているの。母はあなたたちようだった。髪は輝き、目も輝いていた。暮らしては優しく、太陽は暖かかった」

恭しく跪くと、ウィック夫人の足元に頭をたれる。しかしリ・ウォンの激しさに恐れをなした夫人は、思わず数歩後退する。

リ・ウォンは、話したいと必死になりながら立ち上がった。同じ人種の間人なのだという圧倒的な意識を、無能な唇は伝えてくれない。

「交換する？ 取引する？」と、ウィック夫人が質問する。優越する者たちがするように、ピジン言語を使っていた。

夫人は、自分の欲しいもの示すため毛皮に触れ、それから数百グラムの砂金を瓶に流し込んだ。瓶を振って、誘惑するかのようにその黄色に輝く物体をもてあそび、指のあいだを通過させる。けれど、リ・ウォンが見ていたのは、彼女の指のほうだった。ミルクのように白く整った形の指。先にゆくにしたがって気持ちよく細くなっている。先端には宝石みたいな爪がついていた。自分の手を隣りに置いてみた。仕事で疲れガサガサになっている。リ・ウォンは泣いた。ウィック夫人は誤解してしまう。「そう、金よ」と促す。「立派な金。交換？ 取引？ 交換する？」。夫人は、もう一度手で毛皮の服に触れた。

「ハウ・マッチ？ 売る？ ハウ・マッチ？」夫人もねばる。縫い合わせに使われている臍の具合を確かめるために、毛皮をいじっている。

リ・ウォンには通じていない。夫人の言葉は意味を欠いたままだ。自分の失敗に落胆し、それが表情に浮かんでいるだけだ。自分が同じ人種の女だとうやうやって伝えられるのだろうか？ 同じ種族、多くの男と女のなかにあって血の繋がった姉妹関係にあると知っていたからだ。部屋の中を彼女の目は探っていた。そこらじゅうに掛けてあるソフトな布、女性用の服、楕円の鏡、下には美しい装身具、アクセサリー。これらのものの亡霊に憑りつかれたみたいだ。前に見たことがある。それらを見てみると、意識もしないのに、口元の筋肉が音を作ろうとして震える。ある考えが浮かび、姿勢を正した。落ち着かなくちゃ、取り乱してはいけない。今度は、誤解はないはずだから。溢れ出しそうになる涙をこらえて震え、そして姿勢を正す。

リ・ウォンはテーブルの上に手を置いた。「テ・ー・ブル」と明瞭にくっきりと彼女は発音した。「テーブル」とくり返した。

ウィック夫人を見つめた。「いいわよ」という表情だ。リ・ウォンは嬉しくなる。でも気持ちをしっかりさせて舞い

上があったりはしない。「ス・ト・ー・ブ」と続ける。「ストーブ」

夫人が頷くたびに、彼女の興奮はますます高まる。よろめき、つかえながら、すごい早足で彼女が部屋の中を歩き回る。忘れられた単語の光はすぐ現れたり、ゆっくりと姿を現したりする。一つ一つ、品々の名前を挙げていった。やがて立ち止まる。勝利の笑みを浮かべている。背筋を伸ばし、頭は少し上向き。胸をはり待っている。

「猫ね」と、ウィック夫人は笑いながら言う。幼稚園の先生がするみたいにゆっくりと。「猫が、鼠を、捕まえる、のが、見えます」

真剣な面持ちで、リ・ウォンは頷く。この人たち、ついに分かってくれている。そう考えると、茶色の肌の顔が紅潮してくるのが分かる。笑みを浮かべ、さらに力強く頷く。

ウィック夫人は、ギディング嬢に向けて言う。「どっかのミッシヨナリーでちょっとだけ勉強したんでしょ。見せびらかしたいのよ、きつと」

「そのとおりね」とギディング嬢が笑う。「馬鹿な娘よ。こんな自慢大会につき合っていたら、私たちの寝る時間がなくなってしまうわよ」

「でも、あの着物が欲しいの。古いものではあるけど、仕立てはしっかりしてる。一流品」。リ・ウォンのほうを向いた。「交換？ 取引？ 交換するの？ ハウ・マッチ？ いくらならいいの？」

「きつとドレスとかそんなもののほうが欲しいんじゃない？」とギディング嬢が提案する。

夫人はリ・ウォンに近づき、ネグリジェと毛皮の上着を交換しようと仕草で合図する。物々交換の意図を伝えるため、リ・ウォンの手をとり、夫人はひだのついた胸のあたりのレースやリボンに触らせる。生地具合を感じてもらおうと手の位置を動かしてみる。ところが、ネグリジェの前を留めていた、宝石をあしらった蝶の形のボタンはきちんと掛かっ

ていなかった。それで、前身頃の片側が開いてしまったのだ。乳飲み子の唇を知らない白く硬い乳房があらわになった。ウィック夫人は、この偶然のいたずらを冷静に正した。けれど、リ・ウォンのほうは大声で叫んでいた。毛皮の上着を引きちぎり、自分の乳房、ウィック夫人のと同じくらい白く硬い乳房を見せた。言葉にならない言葉でしゃべり、必死にジェスチャーをして、同じ人種であると証明しようとしていた。

「混血というわけね」と、ウィック夫人は言った。「髪の色から、そんなことではないかしら、と黙っていたのよ」ギディング嬢は汚いものには耐えられないという仕草をした。「お父さんからもらった白い肌がご自慢なのね。けがらわしい。イヴリン、何かをやって追い払ってくれない？」

しかし夫人はため息をついただけだ。「かわいそうな娘、何かしてあげられることがあるといいのだけど」外から、重い足取りが地面の石くれを踏む音がしてきた。キャビンの戸が開く。カニムが入ってきたのだ。ギディング嬢の目には、すぐさま自分が殺されるシーンが浮かぶ。が、ウィック夫人のほうは、沈着冷静なままカニムに対面する。「なんの用かしら？」と訊いた。

「初めまして」と上手な受け答え。同時にリ・ウォンを指差し、カニムは率直に言う。「俺の妻だ」リ・ウォンのほうに手を伸ばすと、彼女は手を振り払おうとする。

「言って、カニム。伝えて、カニム。私が……」

「ポウ・ワ・カーンの娘であることか？ この人たちにそれがなんの関係がある？ そんなことに興味があるはずがなかるう。とんでもない女房だと伝えたほうが、まだましだろう。夫が深く眠っているすきに、寝袋から抜け出すような女房なんだから」

もう一度、カニムは手を伸ばした。リ・ウォンは飛びのきウィック夫人のほうへ逃げた。リ・ウォンは夫人の膝元で

必死に訴える。膝を掴もうともしていた。夫人は後ずさりする。そしてカニムに許可の目配せを送った。カニムがリ・ウォンの腕を掴み起き上がらせた。リ・ウォンは、絶望のあまり狂ったようにもがいた。ゼーゼーいって息する胸が上下するほどの格闘になる。部屋を半分を二人は駆けまわっていた。

「行かせて、カニム」と、リ・ウォンはすすり泣く。

しかし、彼女が抵抗できなくなるほど腕を捻った。「小さなムース鳥の記憶が強すぎて、面倒に巻き込まれちゃったんだ」と、またカニムは始めた。

「知ってるの、分かっているの」と、彼女は話をささぎる。「雪の中に男がいたのが見えるの。四つんばいで這っている姿が、今までにないくらいはっきり見える。私は子どもで、彼の背中におんぶされてる。これは、ポウ・ワ・カーンに会う前のことなの。あの小さな村に住む前のことなの」

「分かっているんだ」と答えながらも、彼女を戸口のほうへ引っぱってゆく。「が、俺と一緒にユーコン河を下り、忘れてしまふんだな」

「忘れないわ！ 私の肌の色が白いままであるかぎり忘れない！」必死に入り口の側柱を掴もうとしている。イヴリン・ヴァン・ウィック夫人に訴えの視線を投げかける。が、これも最後だ。

「それじゃあ、忘れ方を、この俺、カヌー使いのカニムが教えてやるとしよう」

こう言いながら、カニムはリ・ウォンの指を戸口から引き剥がした。こうして二人は、旅路へと帰っていった。

《訳注》

- (1) 「白人」(Fah)。ヒロインの意識を表現するため「白人」とした。客観的には、おそらく混血児であろう。
- (2) 「ムース鳥」(moose-bird)。現代においては「カナダカケス」と呼ばれている。スズメ目カラス科に分類される小型の鳥。

## 【訳者付記】

“Li Wan, the Fair”。短編集『氷点下の子どもたち』に九作目として収録されている作品。執筆順では四番目。六五〇〇語。初出掲載雑誌は『アトランティック・マンズリー』誌。執筆は、一九〇一年八月中旬ぐらいからで、同月三日に原稿は送付されている。前にもふれたが、執筆上の前作「ナム・ボック」を八月三日に脱稿してから二三日のあいだ、作家活動の記録は残っていない。この短編が良質の文章ばかりで書かれているとしても、二十日の執筆時間を要したとは考えづらい。プロットのアイディアとしては「フリークラ・ヒーンをめまい」という先行作品があり——ネイティブに育てられる白人という捕囚ナラティブ——、そして最後の二人の女性があれば胸を並べるといふ驚くべき展開が、執筆中の突然の閃きとも考えにくい。プロットは、そして夢と覚醒、幻想と現実というモチーフも含め、ロンドンが得意としたものであり、かなり作品全体のイメージが固まってから執筆が開始されたと想像される。二十日まるまるロンドンがこの作品に費やしたとは考えづらいのだ。いずれにせよ、この作品以降「太陽の土地サンランドの奴ら」「最強の嘘つきマスター」と、続けざまに第三短編集のための短編が執筆されることになる。

掲載誌の『アトランティック』は、支払ってくれる原稿料が高くはないが（本作品は百ドル）、当時のもっとも文化的・文学的影響力の強かった文芸雑誌である。ロンドンは、『マクルアーズ』や『スクリブナーズ』などの一流誌四社に原稿を送ったあと、『アトランティック』に送っている。これは、大まかにいって「生命の掟」とは逆のコースと言える。後者の場合には、『アトランティック』で不採用になり『マクルアーズ』に掲載された。

本作品は今日ではそれほど高く評価されていないようだが（アンソロジーなどに収録されている回数が多いとは言えない。もちろん「生命の掟」とは比較にならない）、作家の意識において、当時の文学マーケットの状況において、かなりの自信作であったのだろう。投稿状況をこの二作で比較した場合、とりわけそれが分かりやすい。

そのような自己評価に納得できる傑作であると思う。

「ホワイト・サイレンス」のように、作品は人と犬との関係を記述して幕を開ける。典型的なジャック・ロンドンの世界である。彼のトレードマークとさえ言うてよいだろう。が、ここでの主人公は女である。意外と思われるかもしれないが、生か死かの極限状況下のマッチョな男たちの世界を描いたことで記憶されるロンドンは、初期のころから、またクロンダイクという極北の地を描きながら、多くのヒロインを登場させている。たとえば処女長編の『雪原の娘』（*A Daughter of the Snows*）のヒロインはフローナ・ウェルスである。少なくとも前半——少年向け冒険小説のようになってくる後半にたどりつく前まで——は、小説が焦点を当てるのは彼女である。



大は、オロ ("Olo") とバッシュ ("Bash") の二匹が言及される。二匹は、一對の乳房を連想させるし、オロというスペリングはそれをグラフィックに見せているようである。

カニムという夫がいる。が、どう見ても、インディアンや原住民のリアリステックな表象というより、男性中心主義者のステレオタイプだろう。文化的ステレオタイプとしては、ウィック夫人とギディング嬢が極北の地へと赴いた動機も、極端なまでに「典型的」である。都市部、文明の因習から離れて自然に帰りたいという、当時流行の発想であるからだ。

しかし、このような文化的クリシェの要素をたぶんにもちながらも、ユニークな作品であることに間違いはない。女性同士の連帯か反目かが ("sisterhood")、また、二人の女性が胸をさらけ出し合うことになるというプロットも、きわめてユニークでオリジナルである。現代日本の性道徳、性への感受性は、たぶん明治期以降に西洋文化の輸入とともに定着したと思いが (その後の「性の革命」とされる動きはあったが)、それはまさにヴィクトリア朝道徳の一部であった。だとすれば、この衝撃的な展開は、現在においても当時と同じくらいに強烈なインパクトを与えるだろう。

ここでもそれが翻訳において再現できているかどうか心もとないのだが、おそらくもっとも印象的なのは蹂躪された自然の描写だろう。リ・ウォンは、カニムという夫に連れられて旅している。彼女は幻覚において、自分の本当のアイデンティティーへの手がかりを掴み、またそれに苦しむ。このアイデンティティー探求のプロットが、「キャビン」という音をリ・ウォンの唇が発しそうになるあとの場面で、一度目のクライマックスを迎えるのだ。そして、圧倒的な描写力で略奪と収奪のかぎりを尽くされたクロンダイクの自然が描写されるのである。ねじ伏せられ蹂躪され虐殺された自然の姿だ。そこに蠢き巣くう (「大きな虫」と表現される) クロンダイカーたちの「狂気」を、これほどまでに的確に示す方法は、ほかにないのではないかと思わせる。何の前触れもなく突然に現れるこのカオスの場面は、おそらく、ヒロインの心象風景の意味も担っているだろう。さながら抑圧された白人としての無意識が噴出してしまったかのようなのである。内面と外環境の「照応」は ("interior" と "exterior" の同一化と Mark Seltzer は指摘している)、リアリズムを芸術の地位へと降格させる一つの手段であろう。